

「9条フェスタ」の「受け継ぐ会」で聞いた旧日本軍兵士の戦場体験

芹沢昇雄 2008/10/23

東京・品川で今日18日、「9条フェスタ」が開かれ、その一環として中国大陸で戦犯に問われた体験を持つ旧日本軍兵士が証言する分科会も、開かれた。証言に立ったのは、いずれも90歳に近い方たち3人。この方たちは、1昨年から昨年にかけて、中国へ謝罪の旅に出て、講演を行ったり、被害者の墓前でお詫びの言葉を述べてきた、という。延べ、約300人も参加者は、3人の話の一言一言を聞き逃すまいとするかのように、熱心に聞き入っていた。

日本 戦争



「謝罪の旅」を証言する(左から)坂倉さん、篠塚さん、小山さん。司会の平山さん

東京都品川区の「きゅりあん(品川区立総合区民会館)」で10月18日、「第6回 9条フェスタ」が開かれ、約70団体、2800人が参加した。その一員として「撫順の奇蹟を受け継ぐ会(受け継ぐ会)」も参加した。6階の中会議室の「受け継ぐ会」(下記参照)の会場には、惑わず直行する参加者が多く、朝の第1部から50人余りの会場がいっぱいになり、延べ約200人が訪れた。

第1部は「私たちはなぜ中国へ謝罪に行ったのか——元『中帰連』会員のリレートーク」と題し、元「中帰連」(下記参照)の日本兵だった坂倉清さん、篠塚良雄さん、小山一郎さんが平山百子・東京支部長の司会で証言を行った。

3人の方はそれぞれ90歳近い年令に達し、一昨年暮れから昨年にかけて相次いで、自らの泥靴で踏み荒らしてきた中国の地へ謝罪の旅に出かけた。坂倉さんは「南京大虐殺」のあった南京へ、そして、香港の大学生たちの前で「加害」(ご自身は「南京」には関与なし)を証言・謝罪し、その後、ピースボートにも乗り、若者たちに講演も行った。

旧731部隊の少年隊員であった篠塚さんは中国東北地区、ハルピンの「731部隊跡地」に永平寺と総持寺の僧侶を伴って、731部隊の犠牲者に心からの供養に同行した。小山さんは、所属する部隊が強制連行を展開した「山東省」を訪ね、被害者のお墓の前で謝罪して来た。

第2部では、「後半生は平和のために闘った——2つの元軍人団体の対談」で、「日中友好元軍人の会」事務局長の広田広太郎さんと、元「中帰連」事務局長の高橋哲郎さんが、熊谷伸一郎・事務局長の司会で語り合った。

両組織は、ともに50年に渡って営々と「中国侵略戦争」参加の体験を語り、反省のための証言を繰り返してきた。また、それぞれ多くの証言集も発刊してきた。しかし、お互いに年を重ね、中帰連は2002年に解散し、その意志を「受け継ぐ会」にバトンタッチし、元軍人の会も「受け継ぐ」組織を検討している。

第3部は「私たちは『蟻の兵隊』だった——山西省・『太原戦犯管理所』体験者の対談」と題し、映画「蟻の兵隊」に出演した奥村和一さんと「太原戦犯管理所」に収容された稲葉績さんの対談が、野村真巳・埼玉支部長の司会で進んだ。

2人は45年8月15日の敗戦以降も中国・山西省で4年間もの間、銃をとって八路軍と戦った。彼らは軍の命令で現地の軍閥・閻錫山(えんしゃくざん)軍に組み入れられて、多くの戦死者を出しながら八路軍と闘い、49年4月、太原城が陥落して「太原戦犯管理所」に収容された。

敗戦後12年を経た1957年に帰国したところ、「勝手に残った」との厚生省の見解の下に、今なお彼らは棄民扱いされ、恩給ももらえず裁判でも敗訴した。多くの参加者は、ひと言も聞き逃すまいと真剣に聴いていた。既に、戦争体験者が次々にお亡くなりになってゆくなかで、体験者・ご本人たちの「証言」は非常に貴重であった。



「戦後運動」の闘いを話す、広田さんと高橋さん。司会の熊谷事務局長【中国帰国者連絡会(中帰連)とは】

私たちは、先の日中15年戦争の間、日本軍国主義の積極的な手先となって数多くの非人道的な罪を

犯し、敗戦後、中国の「撫順戦犯管理所」(969名)と「太原戦犯管理所」(140名)に、戦犯として拘留されました。中国の戦犯管理所では強制労働がないばかりか、有り余る時間が私たち戦犯に与えられました。中国政府の戦犯にたいする方針は、「戦犯とても人間である。その人格を尊重せよ」という人道主義の政策であり、管理所の全工作人員も個人の恨みを超えて、この政策を忠実に実行されました。

工作人員たちは、日々コウリャン飯を食べながら、戦犯には白米飯と豊かな副食を精一杯調え、罵る戦犯には笑顔で応え、病人には高価な貴重薬を惜しげもなく投与しました。その他、衛生・運動・文化・学習などすべてに好い条件を保証されました。この人道的で暖かい待遇は、私たち戦犯に大きな感動と反省とを呼び起こしました。昔、私たちが犬畜生同様に虐待し、財を奪い、焼き、殺して来たその中国人から、今こうして優遇されている。私たちは、中国人の道義性の高さに感動し、このことをどう理解すべきか、真面目に考え始めました。

こうして私たちは真剣に学習するようになり、世界の変化や日本の実状を知り、ものの道理を弁えるようになりました。特に、自己の過去を反省する学習によって、人間の良心を取り戻し、過去の罪を告白して、中国人民に謝罪する認罪運動を巻き起こすことが出来ました。罪を許されて帰国した私たち1000余名は、1957年、中国帰還者連絡会を創立し、現在まで40数年間、一貫してその闘いを続けて参りました。

私たちの活動の出発点は、「認罪」(過去の戦争の非を認めること)であります。私たちは、常にこの認罪の立場に立ちながら、2度と日本に侵略戦争への道を許さず、同時に日中友好、ひいては世界の平和に、いささかでも貢献出来ればと考え、残り少ない人生を共に手を携えて活動しております。皆さん、わが会の趣旨にご理解を頂き、併せてご支援・ご指導を賜りますようお願い致します。なお、会が発行した書籍、『完全版・三光』(晩聲社)、『私たちは中国で何をしたか』(三一書房)、『帰ってきた戦犯たちの後半生——40年史』(新風書房)、季刊『中帰連』等、ご一読願えれば幸いに存じます。

※「中帰連」は2002年、全国組織を解散し、その事業を「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」にバトンタッチした。



山西「残留」と「太原戦犯管理所」の証言をする奥村さんと稲葉績さん。司会の野村さん

敗戦後、ソ連軍に武装解除されて60万人もの日本軍将兵たちが、酷寒のシベリアへ連行された上に、強制労働をさせられ、その内約6万人が犠牲となった事実は広く知られています。しかし、敗戦から5年後まで残されていた一部の兵士から969人が戦犯として中国へ引き渡された事実は、あまり知られていません。1950年の初夏、彼らが到着したところは撫順戦犯管理所だった。そこは、かつて日本軍が占領していた時代の撫順監獄で、「抗日分子」への拷問で悲鳴の聞こえなかった日はなかったそうです。皮肉にも、そのときの看守長も収容されました。

「俺たちは戦犯ではない」。運命の暗転におびえ、自暴自棄になり、抵抗する日本人戦犯たち。戦争が終わつてもう5年、「軍の命令に従っただけだ。どうして俺たちが戦犯なんだ」と……。しかし、彼らの中の多くの者は戦争中、中国で捕虜や民衆を殺し、食糧を奪い、家々を焼き払い、毒ガスや生物兵器を用いて戦争犯罪を行っていたのです。

人道的な待遇と、人生で初めて与えられた、ありあまる時間のなか、やがて戦犯たちの心に変化が生じ始めました。暖かく接してくれる職員たち、彼ら中国の民衆に対して自分はどんなことをしていたのか。それから戦犯たちの、今に至る、「認罪の旅」が始まったのです。

やがて「あれを話せば死刑になる」という事実を認め、謝罪した。6年間を要した。中国の寛大な政策によって認罪が認められた戦犯たちは、許されて帰国した。すでに戦後12年が経過していた。少しずつ生活を取り戻した彼らは「中国帰還者連絡会」を結成し、今日まで「日中友好、反戦平和」を基調とした活動を展開してきました。「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」は、中国帰還者連絡会の精神と事業を受け継ぐために結成しました。